

一九三〇年代の一キリスト教主義女学校

——同志社高等女学部の状況——

宮 沢 正 典

序

明治時代のキリスト教主義女学校が、日本の近代化のなかで、女子教育史上先駆的な役割を担ったことは周知と云っていいだろう。これを受けて、第一次世界大戦の前後、中等教育の要請への対応と、欧米流デモクラシーの流行のなかで、一八九〇年代末以降すでにいくつかの女学校で、専門学校の併置が認可されていたが、この時期次第に充実整備されている。

さて、一九三〇年代のキリスト教主義諸学校は、先行する整備充実の時代の後、国粹主義と戦時下の苛酷な条件のもとに屈服を強いられ、四〇年代前半日本の敗戦に至るまでついに死活を問われる、という一般的認識が存在しているように思われる。

これは大筋において間違っていないだろう。しかし、少くとも同志社女学校に関しては、三〇年代には女子専門学校と分離し、制度的安定と社会的評価をえて、生徒数も確実に増加を辿っている。もちろんキリスト教主義のゆえに

担わされた課題は小さなものではなかったけれども、戦時下の中等学校一般が辿った苦難や屈服という普遍的な共通項としての要素も、見逃がすことはできない。

七〇年代のいまから見て、想像以上に三〇年代の日本国家の趨勢と自発的に共存しながら、しかし同時に、現在が、キリスト教主義に対して安逸であり無関心というより無視とさえ言われかねないような状況に比して、却って弾圧下において、いまより濃密なキリスト教があり、共同体的な同志社学園があったことも間違いない。

三〇年代といえば、丁度その半ばの三五（昭和一〇）年一月同志社創立六〇周年を迎え、その後一〇年間にあたる。この時期を中心に同志社女学校の資料を整理しながら、一キリスト教主義女学校の状況を素描しておきたい。なお、原資料の閲読に関して同志社女子中高校長仁井国雄先生から便宜を与えていただいたことを謝す。

(1) 仁井国雄「『挑戦される同志社』」『同志社時報』第五六号、一九七五年。

一

同志社中学長末光信三が更迭されて、同志社高等女学部に転じたのは、一九三一（昭和六）年四月であった。このうち中学長には、海軍大佐で数学を担当していた野村仁作が就任して、一九四五（昭和二〇）年の定年まで在任した。更迭の原因は、末光の回想によれば、配属将校の派遣と軍事教育の開始のなかでつくられた。初め配属将校は学校長の指導下に軍事教育を行なうということであったのが、次第に様子が変わって学校長をも指導するに至り、「軍事教

育の名の下に学校までも軍隊化せんとし、末光としては「同志社教育が日一日破壊されるのを黙視出来ず」、配属将校との衝突を避けられなくなった。経緯は詳らかではないが、軍事教育の枠を超えて「礼拝などやめて天皇中心の朝拝に変えたらどうか」というような形で「指導」が行なわれ、若い末光（同志社大学予科教授から一九二三年、三八歳で中学長に転じていた）はこれに抵抗し、それは軍部から同志社本部への干渉となり、同志社としては新たな難題を回避するために更迭となった。

末光更迭は、一九三〇年代の初めにあたって象徴的な事件であった。

高女部は末光を歓迎し、かれはその好意に対し心底から感謝感激を覚えて、及ばずながら女学部のため献身奉仕を誓わずにはおれなかったと述べている。こうして松田道校長（同志社女子専門学校長と兼任）のもとに、中桐道太郎にかわって高等女学部長に就任し、戦争末期敗戦直前の一九四五年四月までその地位を占めた。末光がそこを退くことについては後述しなければならない。

さて、こうした末光更迭前後、昭和初期の同志社高等女学部の状況の考察から入っていききたい。

明治の草創以来の苦節については、既にいくつかの叙述がある。それらの蓄積を基盤に、冒頭に触れたような大正期の中等教育への要請という一般的条件と結びついて、大正末期から昭和初期にかけてある結実の時代を迎えたと言っている。

同志社女学校の校名の変遷は、学制の変革も伴って複雑だが、基本的には一八八九（明治二二）年以來は専門科と普通科に分かれ、それぞれ数回の名称変更を経て、前者が同志社女子専門学校（一九三〇年）、後者が同志社高等女学部（一九二八年）と名称上定着するのが昭和初期であった。

1930年代の一キリスト教主義女学校

第1表 卒業生数の変遷

年度	高女部		女 専		年度	高女部		女 専		年度	高女部		女 専	
	英文	家政	英文	家政		英文	家政	英文	家政		英文	家政		
1920	44	9	10		1930	116	101	75		1940	188	21	39	
1921	34	14	5		1931	127	112	78		1941	185	19	31	
1922	38	19	21		1932	132	107	72	19			35		
1923	55	23	23		1933	134	90	63		1942	190	25	68	
1924	95	34	0		1934	133	78	53		1943	196	37	100	
1925	123	63	17		1935	134	49	48	補29					
1926	123	72	45		1936	130	51	45	4	1944	196	44	96	
1927	144	99	85	補23							修50			
1928	148	128	75		1937	186	28	37	1945	136	49	124		
1929	158	117	82		1938	184	20	31		修219				
					1939	153	22	34						

この間、前者は一九二四（大正一三）年文部省から中等学校教員無試験検定による免許状下付の指定校として認可を受けている。同年二月八日、同志社女子部への貞明皇后の行啓がある。

行啓についての当時の評価は、総長海老名弾正の言葉に集約できる。つまり、キリスト教主義を標榜する同志社は、創立以来政府当局から邪魔物とされ、国民の多数からも嫌悪されて、発展の障害となってきたが、行啓は「因襲の僻見を綺麗にとり去り給うた」のみならず、同志社人に「基督教の色彩が寧ろ稀薄になつてゐたかと思ひ、自ら戒め、自ら恥ぢ、恐縮」させ、「本来の精神教育を以て面目一新すべき時期にあるは、同志社内外より要求する所である」と受けとめてゐることである。

一九二四年の右の二条件が、生徒数増加につながつたことは、第一表の卒業生数の推移の中に読みとれるのではないだろうか。

第2表 経費予算

	1930	1935	1938
収入	50,568円	74,444円	77,069円
授業料諸収入	47,660	71,997	72,856
寄宿舎費	1,650	990	1,680
補助金	1,228	1,257	1,431
その他収入	30	200	1,103
支出	50,568	74,444	77,069
給料	35,751	45,585	45,432
備品費	300	150	150
消耗品費	1,700	1,835	2,380
図書費	150	250	250
機械標本費	500	980	1,300
修繕費	725	1,077	1,923
寄宿舎費	1,580	990	1,680
その他支出	9,862	23,577	23,954

第3表 教職員・生徒数

		1930	1935	1938
教員	校長(兼)	1	1	1
	専任	25	27	28
	舎監	1	1	1
	嘱託	9	23	19
職員	書記	2	2	2
	寮務係		1	0
	看護婦			1
生徒	定員	750	950	1,000
	実数	767	977	987

(各年度『同志社高等女学部一覧表』より作成)

定員増認可のテンポは次の如くである。

高女部は、一九二〇(大正九)年二五〇名↓五〇〇名、一九二二(大正一一)年五〇〇名↓七〇〇名、一九三二(昭和六)年七〇〇名↓七五〇名、一九三二(昭和七)年七五〇名↓八〇〇名、一九三三(昭和八)年八〇〇名をこの年度より一九三六(昭和一一)年度まで四年間毎年五〇名宛増加し一〇〇〇名にするというように急増しており、女専も一九二二(大正一一)年五〇〇名、一九二五(大正一四)年七五〇名と増加している。

また、当時の経常予算規模は、第二表のように、およそ五〇八万円であり、収支の大半は生徒の納入する授業料と教職員の給料であり、それぞれおよそ九五パーセントと六〇七〇パーセントを占めている。教職員、生徒数の推移は第三表の通りである。

設備面でも、従来のジェームス館、静和館やその他の木造校舎に加えて、一九三二(昭和七)年二月に栄光館が落成、五月には大学にアーモスト館が竣工している。ファウラーの寄付をもとにして建築費一八万円を要した栄光館は当時の京都で耳目をひくに足る建築であった。

こうした現象面を追っていけば、やがて聴く暗い足音にもかかわらず、明治大正期の蓄積の上に一斉に開花をみたのが昭和初期であったと言えなくはない。一九四〇(昭和一五)年の同窓会館竣工と翌四一年日米関係険悪化にともなう、クラブ、ヒバート、カーブ、トマスら同志社の外人教師の帰米をみるなかで、米國太平洋婦人伝道会よりデントンに贈られたパイプオルガンが、栄光館に設置されたのが最後の二輪であろうか。以後咲き出るよりは、いかに防護していくかが課題であり、弊えんとして迎えたのが一九四五年の敗戦であった。

(1) 末光信三「思い出」(同志社創立八拾周年記念誌「同志社女子中高、一九五五年。同「思い出を語る」(『同志社創立九十周年記念誌』同志社女子大、女子中高、同窓会、昭和四一年)。なお、末光の人物像については、海老沢有道「末光信三八同志社人物史36」(『同志社時報』五一号、一九七四年)を参照。

(2) この変化は、たとえば同志社中学一九二九年卒業の久永省一と一九三三年卒業の野村芳雄の三年間の差のなかに見られる。久永は、三年のときから軍事教練が正課となり、配属将校を迎えたが、彼らは広い視野をもった立派な教官であったと回想している。野村は、満洲事変を契機に彼らは急変し、チャペル正面の新島妻の肖像が脇にやられ、長髪禁止、ゲートル着用、国旗掲揚の強制などに顕著であったとしている。生徒にも同志社の自由の喪失を配属将校を通して見るところがあった(久永省一「思い出にのこる二つの時期」、野村芳雄「末光学長退任の頃」とともに『同窓会誌・創立百周年記念号』同志社中学校同窓会、一九七五年)。

なお、こうした配属将校の変化は、地方の中学教師であった杉森久英が、はじめ体操教師として最末席を与えられていた者が、配属将校として校長さえも足もとに懼伏させるにいたった経緯を、体験的に述べているのと符合する(杉森久英「昭和史見たまま」読売新聞社、昭和五〇年、一一六―一二一、一二三―一二七ページ)。

(3) 末光信三は「中学長を解任せよと、同志社本部に半ば命令的に通達して来た」としている(前掲「思い出を語る」)。この点未確認だが久永省一は「おそらくその通りであつたろう」としている(久永省一「同志社で話したこと書いたこと」洛北書房、昭和五〇年、五六―五七ページ)。また、末光学長退任式に生徒代表で謝辞を述べた野村芳雄は、罷免、更迭か配属将校の引揚げかを「迫つたようだ」としている。彼らは留任ストを計つたが、同中を潰さぬためにと担任加藤延雄らから切々訴えられて、涙とともにストを中止したという(前掲「末光学長退任の頃」)。

(4) 同志社五十年史編纂委員会『同志社五十年史』カニヤ書店、昭和五年。青山霞村『同志社五十年裏面史』からすき社、昭和六年。同志社々史料編集所『同志社九十年小史』学校法人同志社、昭和四〇年、その他。

(5) 海老名弾正「皇后陛下行啓に就いて」『行啓記念号・期報・第五十号』同志社女学校学友会・同窓会、大正一四年。

(6) 『同志社同窓会名簿』(昭和四七年)に拠つて作成したが、『同志社女学校期報』の「学報」欄にある各年度の卒業生数と少差のある年度がある。

同志社女学校は、どのような地域からどのような階層の生徒を集めていたのだろうか。

明治時代を通して、専門科、普通科あわせてついに二〇〇名に達することのなかった小さな学校であったころには、却って遠隔地からの生徒の比重が大であった。たとえば一八九三(明治二六)年には、京都府市あわせて一八名(二三パーセント)に対して、他は北海道を除く全国各地から入学している。通学生は僅か一六名(三六パーセント)であるのに対して、寄宿舎生は実に五二名(六四パーセント)を占めていた。それが一九三〇(昭和五)年には、生徒数は、約一〇倍近くに増加しているが、京都市三五五名(四六、二パーセント)府下八九名(一一、六パーセント)に拡大している。これに伴って寄宿舎生は七、一パーセントに激減している。しかしそれでも地域別に見た場合、北海道以外は生徒数は二桁であり、台湾・朝鮮・ドイツをあわせて八名(一パーセント)もいた。戦後の一九六四(昭和三九)年には、京都市二二五六名(七七、八パーセント)府下二二〇名(七、四パーセント)そして近畿二一八(二三、四パーセント)の他は各地域とも一桁であり、一パーセントに達する地域は消滅し、寄宿舎生は四、六パーセントに減じている。時代とともに地方学校化していることが歴然である。各地域に中等学校が設置されていったことも無関係ではない。

この地方学校化は、同時にこの学校の体質を改めていくことになった。

明治期には、生徒の出身家庭層がかなり特定化できるのではないだろうか。それは経済的な特定階層を言うのでは

なくて、一種学行的ないし求道的な体質をもった家庭層という意味でとらてみたい。したがって、家庭的に余裕がなく、学費が負担となる者も多く、奨学金やアルバイトに依存する者が一割以上もあった。こうした事情を反映して、学校全体に質実の風気が漲り、受洗者も多く、一八九四（明治二七）年には、生徒総数七六名中の五四名つまり七割強が信者であった。当局者にも、生徒に対して伝道者ないしそれに準ずる教職などを選ぶことを勧奨する風があり、卒業生の進路には明白な特色があった。一八九四年までの進路状況を見ると、未婚者では七〇名中、教育（二九名）伝道（八名）、看護（二名）、修学中（一七名）などが目立ち、既婚者四六名についても、教役者の妻（一六名）が抜群の一位を占めていた。

こうした性質を帯びてきた同志社女学校は、生徒数の増加をみる大正中期以降昭和期を通して、なお前記のかなり特定化される層を包容しながらも、次第にそうした狭い羈絆を離れて地方学校化を強めつつ、中流的一般市民層と結び付き、変貌を遂げていく。

一九三〇年および一九三五年（カッコ内）の生徒の保護者の職業をみると、商業・交通一四九（二五三）、銀行会社員一二四（一八〇）、農業・水産・鉱業七三（一六）、軍人・教育・法務・著述・画家・その他一五〇（一八五）・官公吏六四（五二）、医師五六（七六）、工業三五（五八）、宗教一一（二四）、無職一一六（二四三）となっており、右の階層的特色が明らかであり、その傾向は強められている。

なお、生徒の学費概算は、一九三〇年では一年生九八円三〇銭（入学金五円、授業料七二円、学友会費三元、教科書一八円三〇銭）、一九三五年には九九円となっている。二年生以上では入学金の代りに家事実習費、旅行積立金などが加算されるが、一〇〇円を越すのは、両年度とも四年生のみである。その他制服費（冬服一六円、夏服三円五〇銭、オーバ

一 二四五〇銭）、正課外音楽（一学期ピアノ八円、オルガン五円、ヴァイオリン八円）、寄宿舎費（入舎時の食器料三円の他、舎費三三円、食費一日五五銭）などがある。

一方、中途退学者も多い。一九三〇年四月、同志社庶務部長への報告によれば、一九二七年はとくに多く、一年生

第4表 退学者・除名者数

	在籍 (2年生以上)	退学・除名
1926	567	18
1927	588	52
1928	560	11
1929	562	22

(同志社庶務部への報告書による)

第5表 志願状況

	志願者	入学者	百分比
1926	271	147	54.24
1927	388	159	40.97
1928	288	183	63.32
1929	262	174	66.41
1930	248	181	73.38

(『同志社高等女学部一覧表・昭和5年度』)

を除く五八八名中五二名に達する者が「退学及除名者数」としてあげられている。これは不況などによる学費支払い不能者を含むであろう。そして年度中途に若干名を募集して補充している。なお、同時期の志望者状況は第五表の通りである。

窪田哲三郎は、明治期の同志社女学校に「どこか悲壮なかげり」を、そして大正・昭和期には「完全に明るい空気」を指摘している。大正期、「生徒は構内の花園の美、周囲の風光の美を楽しみ、且つ全体から云へば宗教的空気が学校内に流れて居る事を

も喜んで居る。……人生に興味を感じ、精神的方面の事が訳ると云ふ点に於て」抽んでいて、とすでにその時代の人によって描かれている。昭和期にも、ある卒業生（一九三二年）は当時の少女雑誌が有名女学校訪問記で同志社はシネラリヤになぞらえられ、「赤い校舎、緑の芝生を背景に生徒達はあのエキゾチックな花が咲き乱れているように……どうしてこんなに美しいのか」と、感心したことを回想し、毎朝の礼拝を通して「自然と気分の休まるような聖句

第 6 表

中央公論	週刊朝日	映画朝日	富朝	朝	キ	少女	少女	少女	少女	婦人	婦人	婦人	婦人	婦人	婦人	主婦	若	文	令	令	雑誌名	学	調査人数
2	2	3	4	4	21	1	1	1	12	1	30	2	16	14	34	31	11	4	0	36	5	124	
2	3	0	1	0	2	4	15	17	30	1	9	0	1	6	11	12	5	0	5	14	4	131	
0	0	0	0	0	2	20	25	58	89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	3	149	
0	5	0	0	0	22	26	43	47	81	0	0	0	0	0	0	15	1	0	0	2	2	149	
0	0	0	0	0	7	16	18	47	118	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	174	
日本児童文庫	一年生ノ英語	二年生ノ英語	幼年ノ友	幼年倶楽部	児童文庫	子供ノ国	子供ノテキスト	子供ノ科学	クラシック	講談雑誌	講談倶楽部	赤い鳥	劇場街	科学画報	科学知識	文芸戦線	新青	改	現	文芸春秋	雑誌名	学	調査人数
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	2	1	0	3	1	5	2	1	6	5	124	
0	0	0	0	0	6	0	0	7	0	0	0	0	0	3	1	0	5	3	0	0	4	131	
0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	149	
0	0	2	1	52	0	4	2	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	2	149	
10	5	0	0	58	10	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	174	
House Beautiful	Ladies home Journal	Muse	譚海	紅雀	ホト、ギス	希望	文庫	歴史画報	園芸画報	泉花	満洲ノ野	朝日グラフ	サンデー毎日	プロレタリア文学	皇族画報	同志社文学	ウイクリ	アラ、キ	上級英語	雑誌名	学	調査人数	
1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	124		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	1	1	41	1	1	4	131		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	149		
0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	2	1	0	10	0	0	0	0	0	0	2	149		
0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1	174		

が心に浮か」ぶ宗教教育を懐かしんでいる。これらは、もはや学行的求道者的な学侶を生む雰囲気ではない。確実に中流市民層のものとなっていることをよく物語っている。

ここに、京都府教育会研究部長岩波喜代登の名で、一九三〇年六月各学校長に要請した「青少年読物調査」に対する同志社高等女学部の報告一覧がある。この調査は定期刊行の雑誌に限り、現に本人が引続き愛読している全部を問うたものであり、校長大工原銀太郎（総長）の名で回答している。第六表の通りであるが、高学年で目立つのは『令女界』『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦女界』などが多く、『婦人公論』『婦人世界』『若草』『キング』『少女倶楽部』などが次のグループをつくっている。低学年では『少女倶楽部』が抽んで、『幼年倶楽部』『少女の友』『少女画報』『少女世界』『キング』などが続いている。当時の指導的総合雑誌『中央公論』『改造』などは僅少である。この一覧のなかにも、右の中流市民層の子女が主流をなしつつあるのが充分窺がえるのではないだろうか。同時に行なった「学用品舶来品使用調」でも、かなりの舶来品使用がみられる。たとえば、鉛筆は調査対象七二〇名中三四四名が使用、消ゴムは同じく五五五名中三九二名が使用などであり、当時の国産品の品質水準を考慮するとしてもかなりの数といえる。

当時、官憲からは次のような通達がなされている。

近時学生生徒ノ思想問題ハ其ノ関係スル所彌々広汎ニ亘リ其ノ情況モ亦益々複雑ノ度ヲ加ヘ来リ（中略）漸次思想問題ニ関スル各種ノ事件ノ發生ヲ見ルカ如キハ洵ニ遺憾トスル所ニ有之将来之ニ対シテハ其ノ取締ヲ一層周到適切ナラシムルト共ニ生徒全般ノ指導訓育上ニ慎重ナル考慮ヲ拂ヒ施設スルノ必要ヲ認メラレ候就テハ（中略）特別ノ講義其ノ他適當ナル方法ニ依リ我国特殊ノ国体、国情、国民性等ヲ明徴ニシテ日本国民タルノ自覺ヲ喚起シ又出来

得ル限り現時ノ思想問題ニ関シテモ公正穩健ナル常識ヲ涵養セシムルニカメ又一般ニ体育ヲ奨励シテ剛健濶達ナル精神ヲ養ハシメ（後略）（昭和五年四月二日、京都府學務部長）

この種の通牒が繰りかえされ、府を通して桃山御陵連合參拜、天皇、皇族の奉送迎參列などが強制されるなかで、まずは靜穩な情況といつていい。

一九三四年に高女部に就任した越智文雄は、それまで「マルキシズム、共產主義思想の嵐が同志社といわず日本の知識人の頭の中を吹きあれていた。しかし高等女学部にはそれがなかった。」「私にとって同志社高等女子部そのものが一つの花園であった」と回憶している。⁽⁸⁾この前年の滝川幸辰京大教授事件が想起できるときである。

それでも、キリスト教を除いては同志社は描けない。

『同志社高等女学部一覽表』によれば、一九三〇年には、教職員三八名中、信者二一名、未信者一七名と分けており、一九三五年では、同じく五六名中、受洗者三〇名、求道者一三名、其他一三名と分けている。これは決して少ない数ではない。これに準じて生徒についてみると第七表のようになる。信者は一九三〇年で一割足らず、三五年にはさらに減少している。求道者を含めても二割には及ばない。別の記録「昭和七年四月新入学生についての調査」〔宗教教育關係書類綴〕自昭和六年度、同志社高等女学部〕によれば、新入生二一九名中、六三名が「自己の宗教」にキリスト教を挙げている。「家庭の宗教」では二四がキリスト教、家族中にキリスト教信者をもつ者が六である。日曜学校に一年以上継続出席者六八名、一年以下の者三〇名、合せると九八名に達する。教会出席経験は五〇名である。これらは、上記の一覽表に比してとくに自己の宗教においてキリスト教が多くみられるのは、入学直後におけるキリスト教への志向を含むからであろうか。

第 7 表

学 年		1	2	3	4	5	補習科	計	
一九三〇	信 者	2	6	15	36	14		73	
	未 信 者	170	153	143	110	118		694	
	計	172	159	158	146	132		767	
一九三五	キ リ ス ト 教	受洗者	4	8	4	16	14	7	53
		求道者	25	51	32	17	1	0	126
	其 他	192	138	166	162	117	23	798	
	計	221	197	202	195	132	30	977	

高等女学部の「教育ノ方針」は、「国民教育ニ留意シ現代女子ニ須要ナル知識ヲ練磨シ且ツ基督教主義ニ據リテ婦徳ヲ涵養ス」(『同志社高等女部一覽表』一九三〇年)としており、その後「教育勅語ヲ奉戴シソノ御主旨ニ基キ現代女子ニ須要ナル智識ヲ施シ且基督教主義ニ據リテ人格ノ向上完成ヲ期シ以テ円満適確ナル信念ヲ有スル日本婦人ノ養成ニ努ム」(同一九三五年)となり、さらに「本学部ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ高等女学校令ニ準據シ修業年限ヲ五ケ年トシ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施シ特ニ基督教主義ノ人格教育ノ特色ヲ發揮シ人物ノ養成ニ努ムルヲ以テ目的トス」(同一九三八年)と、次第に狭雑するところが増大していくが、ともかく「キリスト教主義」が消亡することはなかった。狭雑物介入の経緯については後述しなければならない。

ともあれ、同志社にとってキリスト教主義教育は要諦であり続けたと言っている。ただその内実の変容は、すでに述べたように、明治期との差は大きく昭和戦時下さらに変化していったことは言うまでもない。ここに三〇年代初期の一般的宗教教育の概要を、府学務部長にあてた「生徒ノ訓育方法」についての報告書から読みとっておきたい。

一、毎朝礼拝

毎朝全生徒ヲ集メ神前ニ讚美ヲ呈シ信仰アル各教師ハ交番ニ聖書ヲ朗誦シ神意ヲ説キ現代誤レル思潮ニハ特ニ留意シ至上ノ權威アル神言トシテ穩健ナル思想道德ヲ渙養シ之ヲ祈祷トシテ神人合致ノ信念ヲ育成セリ

二、覚醒運動

春秋兩季ニ名士ヲ招待シテ講演会ヲ開ク

三、毎日囉礼拝

本学園付属教会ニ參集シ宗教的儀式ノ下ニ所属牧師及有力教師ハ説教ヲナシテ日々ノ徳的生活ト時事問題トヲ神意ニ基キテ解説シ純真ナル智情合致ノ信念ヲ育成セリ

四、毎金曜祈祷会

主トシテ寄宿生及ヒ付近ノ学生參集シ司會者祈祷題ヲ豫メ提出シ之ニ基キ奨励説明ヲ与ヘ參集セル各職員生徒ハ各其題目ニ基キ交々祈祷ヲ奉ケテ神人合致ノ徳的信念ヲ育成セリ

五、学友会宗教部

在学生生徒全部ヲ以テ組織セル学友会ノ一部トシテ宗教部ヲ設ケ其事業トシテ左ノ諸項ヲ行ヘリ

(1) 祈祷会 毎火曜日〇時半ヨリ一時迄有志者ヲ參集シ教師ノ奨励職員生徒ハ各徳的生活ヲ祈願ス

(2) 各学級ニ委員一名ヲ置キ其級ノ誘導ト事務ニ当ラシム

(3) 春秋兩季ニ名士ヲ招待シテ講話ヲ聞ク

(4) 夏季休暇ヲ利用シ静肅ナル地ヲ撰ヒテ有志者ヲ集メテ修養会ヲ開ク

六、女子青年会

本会ハ世界的団体ニシテ本学部内ニ支部アリテ多数ノ会員ヲ有シ生徒自治ノ機関タリテ本部ヨリノ問題ニ対シテ
 祈祷会ヲ開キ或ハ本支部ノ集会ヲ屢行ヒテ信仰ヲ養ヒ修養ノ機関トナセリ（昭和五年十二月十日）

翌三一年、日本基督教聯盟よりの七二項に及ぶ詳細な「基督教学校ニ対スル質問書」では、右の線にそつた謙虚
 だが毅然とした応答をしている。生徒中の信者の比率とそれがキリスト教的雰囲気維持に充分かとの問いには「信者
 ハ一割五分位」、「コレ亦不充分、併シ学校ソレ自身が基督教的雰囲気ヲ有スルヲ以テ基督者ノ実数ニハアマリ支配サ
 レズ」とも回答している。末光信三は、同書中の「将来ニ対シテ」の項の第一に「教師ヲ悉ク基督者タラシメタキコ
 ト」を挙げてゐる。次いで「生徒一同ニ今一層基督教的感化指導ヲ徹底シタキコト」、第三に「財政的基礎ヲ一層強固
 ニシタキコト」、最後に「設備充実ヲ計リタキコト」を付している（昭和六年十月二十七日）。その抱負がよく示めされ
 ている。

こうしたキリスト教主義教育のあり方は、いわば首脳による公式的のものだけではなく、一般教員の中にも様ざま
 な形において、よく浸透していたといえる。たとえば、越智文雄は、「花園」に就任直後において、「この世的な執念
 から私を救ってくれたのはバイブルであり」、「毎朝必ず行なわれる栄光館講堂での朝拝は、私にとっては救いであつ
 た」と述べ、自らも在郷軍人会の訓練、本籍地の簡閲点呼に感じなければならぬなかで「心の救いは礼拝の席に列
 なることと、教室で我を忘れて若い魂に英語の授業をすることであつた」としている。同期で就任した海老沢有道
 は、さらに積極的に、同志社建学の精神はキリスト教精神というような漠然としたものではなく「キリストを首とす
 る同志の結合であります。教職員も、学生、生徒も、卒業生もその聖なる体の一部分なのです。同志社はこうしてキ
 リストを主と告白する同志の結合であるべきであり、それに連なる協同体であり、またあるべきであります」と述べ

ている。⁽¹⁰⁾ こうした言辭はスタッフの中で唐突ではなかったと思われる。

『同志社高等女学部新聞』は、一九三五年六月、海老沢らが中心となって創刊したものであるが、校長片桐哲によれば「吾学園の如き独特なる教育理想と主義主張を持つもの、且つ尊貴なる伝統を持つものには」、「相互の深き理解と協力とに俟つ外、他に途はない」ゆえに、この新聞発刊の意味は大きいとしている（創刊号）。各号の第一面には、ほとんど終始片桐の巻頭言と、教頭末光の聖書にかかわる教説が掲載されて、訴えがなされている。この新聞についても後述したい。

教員による聖書講義会ないし聖書研究会は、持続して行なわれ、「昭和十一年度」から「昭和十七年度」までの記録綴りによれば、ほぼ毎週、水曜日に開催され、はじめは常に二〇名に近い教員が出席している。その後一五名前後になり、一五年度に至って一〇名を割ったのが二回、一六年度は一回である。しかし、ほぼ一〇名近くに減少しており、一七年度では専任教員は二六名に減っているが、一〇名を越すのは一回だけとなり、最低五名のときがある。ちなみに、この記録綴りの第一回（昭和二年四月一五日）の出席者は、「教頭、初鹿野、永島、越智、海老沢、明田、木村、杉原、宮川、堀、村山、森川、瀧浦、彌藤、天井、波多野、荒木、森田」の一八名であり、「マルコ伝十章三一節迄」と記されている。これに上野、石塚などを加えればほぼレギュラーメンバーが揃う。また「末光、波多野、宮川、杉原、西村、永島、ヨハネ伝第十六章（讃六一）」というのが、この綴りの最後（昭和一七六月二四日）の記載事項である。

末光信三は、この学校における福音的活動の中心に位置したと目されるが、次のようにも述べている。キリスト教に対する迫害の多い学校において却って真剣なキリスト者が出現し、キリスト教主義学校が却ってなまぬるい信者し

か出来ないという皮肉な事実のあることを指摘したあと「併し吾人の立場よりして観るならば、迫害のある学校に於てすら、真剣な信者が出来るとすれば、況んや基督教主義の学校に於てをやである、吾人の間からこそ真に立派な基督者が出てねばならぬと云ひたいのである、この意味に於て吾人は特に諸子の覚醒と努力とを希望してやまぬのである」と、端的に訴えているが、こうした学校の姿勢は、校長松田道を継いだ片桐哲（一九三三年四月就任。女専校長と兼任）らにももちろん共通であり、繰りかえし訴えられている。

当時の生徒が、これを受けてどう対応したかは、『同窓会報』などの生徒文苑中に拾えそうである。三〇年代とはずれるが古い卒業生がいささか懐旧的に記した文から探せないだろうか。

「毎朝守られる礼拝の時間をサボることをたくらむ、不心得な生徒で私はありましたけれど、八年間うけたキリスト教教育は、教会生活と平行して、私の生涯を一貫する基盤を作ることになった。在学中、耳がタコになるほど聞かされた「同志社スピリット」が、「具体的にどういふものか擷んではいけませんけれど、とにかく」「自恃と誇りと責任の自覚と博愛報仕の精神を叩きこまれておりました。」かくて「キリスト教主義と同志社スピリットが高く揚げられ、その旗印しを慕って日本の隅々から女学生が集まって来ているのが特長でした」(一九一九年普通学部、一九三三年専門学部卒)。

また、一九三七年高女部に入学した一人は、同志社がキリスト教主義学園として困難な立場に追い込まれていくなかでも、「創立以来守られて来た脈打つ同志社の『自由』な空気があり、その中で私は神と人とに愛される人間になる様にと日々教えられ、その空気を充分吸って育った」と回想している。ただ、彼女は「同志社が時代の要請にこたえ得る学校に変貌しなければならなかったのではなからうか」としながらも「ある牧師の話を矛盾に満ちた思いで只

黙って聞くようになった」と漏らしている。いずれも思慮ある婦人たちをはぐくんだと言えよう。

女学部と教師集団がどのような性向をもち、また、生徒たちは何を求めて入学し、何を受教して去ったのかその輪郭を描いてみた。さて、三〇年代の進行のなかで時代の色彩は、この章で概観した女学部にとどくに現われてくるのであろうか。

(1) 以上の数値は主として窪田哲三郎「女子中学校、高等学校の過去と現在」(前掲『同志社九十年小史』に所収、二五六ページ)に拠った。なお、現在は府下と近畿が増加傾向、地方も微増がみられるが、一九三〇年代ほどにも反転の可能性はない。

(2) 窪田哲三郎、前掲書、二五七ページ

(3) 同書、二五八ページ

(4) 『同志社高等女学部一覽表』(昭和五年度、昭和十年調)に拠る

(5) 窪田哲三郎、前掲書、二六二ページ

(6) 松本亦太郎「同志社女学校の現状」(『同志社女学校期報』第三五号、大正三年二月一日号)

(7) 内田規矩子「その頃のこと」(前掲『同志社創立九十周年記念誌』)

(8) 越智文雄「同志社高等女子部在職当時の思い出」(前掲『同志社創立九十周年記念誌』)

(9) 越智文雄、同書

(10) 海老沢有道「私の同志社時代」(前掲『同志社創立九十周年記念誌』)

(11) 末光信三「汝等も去らんとするか」(『▼学友会同窓会会報1932』第五九号、昭和九年七月一〇日発行)

(12) 佐々木アイ「来遊の名士たち」(前掲『同志社創立九十周年記念誌』)

(13) 藤本節子「思い出」(前掲『同志社創立九十周年記念誌』)

一九三一年の末光信三の去就からみて、険しい時代の到来を思わせたのであるが、その後はどうだったのか。

すくなくとも、同志社女子部において、女子部や特定のスタッフを標的とする弾圧の痕跡は、三〇年代に限れば、見られない。その種のもの、野村仁作の同志社中学でも、キリスト教主義への挑戦が繰りかえされ、配属将校による自由主義的教員に対する嫌がらせなどがあつたが、大学に加えられたような公然のものではなかつた。海軍大佐の経歴をもつ野村の存在が、軍部や右翼の圧力への防波堤となつていたことも影響があつたかも知れない。⁽¹⁾ また、湯浅八郎総長を継いだ牧野虎次総長の気骨や柔軟な姿勢も無関係ではなかつた⁽²⁾。

他方、同志社大学は、予科、高等商業学校を含めて、右翼、軍部からしばしばその標的とされて、とくに湯浅八郎が第一〇代総長に就任する一九三五年を転機に、多難な嵐の時代を迎えるのである。

時を同じくして、文部省は全国の学校に国体明徴を訓令していた。国体明徴や軍国主義の時流に対する同志社の抵抗と受難は、次の諸事件を通しても了解されるであらう。

一九三五（昭和一〇）年五月の高商における神棚事件、一九三六年二月の『同志社論叢』事件と上申書事件は、外部右翼団体や軍部の圧迫の加重と同志社大学内部の分裂を一層深刻なものとし、翌三七年の破局へと連繋する。この年には、紀元節式典で湯浅総長による勅語誤読事件、予科配属将校草川靖が使喚する国防研究会による総長排斥決議と学友会幹部の総長排斥血書事件などを経て、七月に予科生のチャペル籠城事件となる。キリスト教主義の同志社が

国体不明徴であるというのが、運動者たちの主張であった。その渦中、日中戦争が勃発している。さらに、一月予料の二教授がアカの嫌疑で逮捕され、同志社の危機を慮ばかった湯浅は、ついに理事会に辞表を呈出し、一二月同志社を去る。同じ日、高等女学部教務日誌には、「午前九時半校庭集合南京陥落祝賀ノタメ旗行列並ニ式ヲ建礼門前ニ於テ挙行、市主催一同出席」とのみ記載されているのは皮肉である。

こうした動向について、女子部の係わりの有無は、湯浅総長の就退任と同志社教育綱領の制定などを除いては、女子部の諸記録からは直接読みとることはできないし、女子部への名指しの弾圧はなかったと見られる。

その理由の一つは、攻撃する側からしても、女子部は攻撃目標としての効果の点で、いわば小さな補助船舶を屠ふ意味しかなかっただろう。この小さな船は、主力艦を護衛するよりもその陰に庇護されるに似ていた。現在よりもはるかに総合学園としての一体性をもっていた当時においては、同じ戦列に属するものとしての痛みが、もちろんなかったのではない。⁽³⁾

第二の理由は、配属将校という外圧を導入するシステムを女子部がもっていなかったことである。逆に言えば、そうしたシステムが自治独立にとつていかに危険なものであるかを物語っている。

湯浅八郎は、総長就任に際して「敬愛する先輩、同僚並に学生諸君」と呼びかけ、次のように決意を披瀝している。

我等は今、同志社の建設が校祖の宗教的信念に基づけるものであった事を忘れてはなりません。同志社は先生一生の幻でありました。神につける冒険でありました。先生は実にこの神聖なる冒険を果敢に神と俱に為されたのであります。斯の故に同志社の校祖は新島先生であります但同志社の校主は神であるといふ事が出来ると思ひま

す。我学園は実に神に属けるもの、その御経緯の中に胚胎し、御摂理に導かれて今日あるもの、従って同志社教育は神より信託せられる神聖なる事業であると申さねばなりません。何人と雖も之を等閑にし、之を私し、之を害ふことは許されないのであります。

……此の確信は、私を駆って「天の父は今に至る迄働き給ふ、我も亦働くなり」との自覚を以て働きつゝ祈り、祈りつゝ働き、同志社の使命達成のために粉骨碎身するの決意を促すものであります。私は今茲に母校同志社の為に献身を、謹んで神と人との前に誓ふ者であります。

時流の矢面てに立ちながらするこの鋭い覚悟の表明を掲載した女子部の雑誌には、続いて片桐哲校長の希望に溢れた文がある。

昭和十年度は何んと云ふ希望に輝ける学年であろう。正に同志社は創立第六十周年に相当し、而も湯浅新総長の下に、男女各学部は新に一千数百名の若き学徒を迎へ入れて、躍進の銳気に満ち充ちて居る。我が女子部を願れば、高等女学部今年度の入学志願者は嘗て見ざる多数であり、各教室は満員の状況である。更に今学年度よりは一ヶ年の補習科を新設し、高等女学部教育の完成を図り、是に三十名の高等女学部新卒業生を收容したのである。又近年女子の専門教育不況の徴を示しつゝあるも、猶吾が女子専門学校は各科共にそれ〴〵相当数の有為なる入学生を迎ふる事が出来、女子部全体に互りて約三百五十名に近き新入生を加へられし事は、誠に歡喜に堪へない所である。

この二つの文章は、如上の關係を象徴していないだろうか。同志社大学は、神棚事件以降の国体明徴を錦旗とする外庄の加重と内紛の激流に翻弄されながら死活を問われていた。

それらのなかで、同志社理事会は、天皇の御真影奉戴の決定（一九三五年）と同志社教育綱領の制定（一九三七年）などをもって、国体不明徴と「基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」（同志社綱領第二條）るがゆえに、狙い撃ちされた同志社を軍部、右翼などから遮蔽しようと努めている。それらは防禦であり同時に屈伏でもあった。⁽⁶⁾

これらは当然全同志社に關することであり、『同志社高等女学部新聞』でも「御真影奉戴」「奉安殿起工式」「古式床しき御真影奉安殿竣工」などを、小さな記事だがその都度最高の敬称をもって報じている。また『同志社高等女学部一覽表』は早速、同志社教育と教育勅語が背反するものではない、という同志社教育綱領を前記のように掲載している。女子部にとっても一つの重要な事柄は、皇上行啓記念碑の建立である。

一九二四年の皇上行啓のことは前述したが、一四年後の一九三八（昭和一三年）一二月に至って、栄光館正面左側にそれを建立する理由は何だったのだろうか。傍の銅板のタブレットには「……海老名総長以下一同感泣シ永ク陛下ノ鴻恩ニ報ヒ奉ランコトヲ誓ヘリ爾來十五年当日ノ感激今ニ忘ルルヲ得ズ乃チ染毫ヲ時ノ宮内大臣伯爵牧野伸顯閣下ニ請ヒテ」建立した、と記してある。この日、片桐校長は次のように語った。

新島先生が教育報国の念願を起して基督精神による同志社学園を創立されましてから、幾多の迫害苦難と闘ひ漸く当初の目的を貫徹して、良心を手腕に運用する有為の青年男女を続々社会に送り出すに至った功績が長くも雲上に達しまして今の

皇太后陛下下の行啓を忝うする光栄に浴したのでした。爾來本校生徒の胸には陛下の御坤徳を日本女性の鑑と仰ぎ奉る敬虔の念が伝統となつて参りました。今後も此の記念の御碑を仰ぐ毎に更に感銘を新たにして、教育の任に当り且つ愈々婦徳を磨き行く生徒を祝福する次第であります。⁽⁷⁾

『同志社高等女学部新聞』は、牧野虎次総長の献上した当日の記念碑除幕式写真アルバムが陛下に嘉納され、「同志社が愈々発展し行く事を満足に思ふ」という言葉をえたことおよび行啓の際の「益々同志社教育の特色を発揮せよ」との言葉を併記して「御聖旨に応へ奉らん事を誓う次第である」と結んで報じている。⁽⁸⁾

ここまで紹介すれば、行啓記念碑建立が軍部、右翼勢力などを超えて、同志社教育が高い所からは認されていることを表示するものであることが了解できるのではないだろうか。

こうしたいくつもの遮蔽物を懸命に構築しながらも、国と時との趨勢に協力せざるをえないさまが、あらゆる記録から読みとれる。

『同志社高等女学部新聞』は、前記のように、同志社教育の理念や方針を、生徒と父母に徹底させ、相互理解を深めることを通して協力体制をえようとしたものであった。それは確かに戦時下キリスト教主義学園のジャーナルとしてのすぐれた個性を伺うことができる。しかし、一九三七（昭和二年）の日中戦争の拡大のころから、この新聞も戦時色を強め同時に「報国」体制を明らかにしていく。

一九三七年一〇月二五日発行の第一一号では、第一面最上段に明治天皇御製、続いて退任の近い湯浅総長の「和協一心、忠誠奉公」と片桐校長の「皇后陛下の御歌を拝して」を掲載しているが、ともに第七二回臨時帝國議會開院式の際の勅語に則った文である。第二面は「非常時局と我が校」を特集している。他の見出しには、「全校を挙げて緊張・活躍、慰問袋一千個製作、慰恤金も献ぐ」「国民精神総動員週間、学校も家庭も非常時体制、一銭献金を本学期中継続」「父兄応召者芳名」「時局ニ対スル学校ノ措置事項ニ関スル件」があり、それぞれの記事で埋めている。最後の項は、対時局教育教化委員会（校長教頭と男女教員各三名および書記一名の計九名）によって打出された事項を公表し

たものである。この委員会は「臨機応変、有意義な処置を取り得る様図って」設置されたものであり、次のような事項を扱っている。

その一「時局ニ際シ教育教化上措置シタル事項」では、「1、事変発生以来毎朝朝拜ニ際シ時局ノ正シキ認識ヲ深メルタメニ講話シ出征軍人ノ武運長久並ニ国威宣揚ノ実ヲ挙ゲ得ラル、様祈願セリ」「2、八月十日生徒ヲ召集シテ国威宣揚武運長久ノ祈願式ヲ行フ」など九項目、その二「時局ニ鑑ミ教育教化上特ニ努力セントスル具体的方法」では、「3、常ニ講堂ノ講壇ニ国旗ヲ掲揚シテ時局認識ノ資トス」「4、生徒ヲシテ慰問文、慰問図画及傷病兵ノ寝衣、慰問袋等ヲ調製セシム」など七項目である。

教務日誌（昭和二年度）によると、それらは京都府への報告を課せられており、九月一日印刷に付し四日付で公表したものである。これらの祈願式、防空演習、出征軍人見送り、慰問袋、慰恤金、また愛国大行進、神社参拝、勤労報仕その他の諸行事は、府学務部が克明に指示しかつ報告を課していることを知らねばならない。

この号の生徒文苑には、兵士への慰問文八篇と他の処世観の文中にも時局と結びつけて決意を述べたものが多い。同年一二月一五日発行の第一二号では、第一面の欄外に「祝南京陥落 賀皇国万歳」と二号のゴチックで刷り込んでいる。第二面の「事変下の本校」には、時局献金「八百円を突破す」に続いて、時局認識を深めるために全校教職員生徒を挙げて胸に日の丸バッジを佩用し、各教室には日章旗の下に「皇軍の艱苦を偲び学業に精励せよ。同志社」のポスターを掲げ、学生の本分に精励していることが報じられている。栄光館では、海軍省出仕水野恭介中佐、基督教連盟嘱託北支從軍慰問使志村卯三郎の講演のことが報告され、在洛全公私立女学生一万人の戦勝祝賀旗行列のことも記されている。また、第三面には「同志社より遣米使節、米国最高学府を通じて、支那事変に対する認識是正」の見

出の記事がある。

第一号に顕著に現われ、いちど帯びたこれらの傾向は、以後失せることは結局なかったばかりか「主張」のなかにもこの傾向が色濃く忍び込んでいるのを知るのである。それと「愛国者新島襄」がことさらに強調されたことであり、とくに一九三七年ころからのそれは、この時局下でなされるときに特有の意味を帯びなかっただろうか。

四〇年代に入って第二二号（一九四一年七月）では、学友会を改組した同志社高等女学部報国団結成について述べ、認可申請中の団則を掲げてある。これを受けた第二三号（一九四一年二月）では、巻頭に無署名の次のような文を載せている。

……近代戦は総力戦である。文字通り国民皆兵である。わが学園に於てもすでに報国団は組織せられ、報国隊の編成は整備して臨戦体制は充実してゐる。我等少女も意気揚々たる少女兵である。学業にいそみつつも国家の総動員態勢の強化に参与し、一朝事あらば隊長指揮のもとに身を挺して難に赴き雄々しく大活躍をなすのである。わが祖国を千年の古都たる京洛の地を些かも敵の意にまかせぬやう敢然立って立派に守るのである。この夏は例年とは全く異なる心構へで炎暑に堪へて真剣に我が心力体力を鍛へたのである。憂国の志士新島先生を校祖と仰ぐ我等同志社少女の覚悟はすでになつてゐる。……

他方、三〇年代の『高等女学部教務日誌』から各年度の状況を、いささか恣意的だが、いま執筆中の時期の一学期末の周辺から拾つてみたい。

◇一九三一年七月一日水曇后小雨二十度

朝拝司会堀牧師代末光部長 讚美歌二八三番

一、今朝朝拜ノ際元寇ノ乱（六百五十年ニ相当セルニヨリ）之ニ関スル講話ヲ部長ヨリアリタリ

一、六月廿九日付ヲ以テ本年度補助金交付（千式百四拾九円）指令府知事ヨリ受領ス即日本部ヘ送付ス

七月一日現在学生々徒異動報告甲乙ヲ財務部ニナス

府視学官ヨリ照会ノ教科書使用状況ニ関スル件回答ヲナス昭和六年六月參拾日同高女第六四号

一、末光部長ハ五学年各組正副組長ヲ引率南禅寺ニ於ケル元寇乱六百五十年祭参拜ノ為メ午后〇時二十分出向

（宮沢註・府庁より代表者の参拜方通知ありしによる）

一、放課後（午后二時ヨリ）家政館ニ於テ聖書ノ研究会開催アリタリ マタイ伝福音書第二十二章第廿二節迄

補助金下付ニ対シ謝状ヲ府知事宛学務課ヨリ送達ス

神戸女学院高等女学部ヨリ生徒数及校友会費ノ件ニツキ問合アリタリ

来ル八日ヨリ第一学期試験開始ニツキ時間表ヲ発表セリ

以下は適宜抽出略記する。

◇加藤教諭、勤務演習トシテ明日ヨリ三週間奈良聯隊ヘ召集ニツキ本日午后出発サル（同年七月二日）

◇初鹿野教諭ヨリ七月十三日ヨリノ水泳部淡路洲本海岸ヘ出向ノ件ニ付通告アリ、水泳部淡路島洲本行希望者申込

通知書ヲ配布ス

横田選手本日午后三時横浜港大洋丸ニテ出帆ニツキ其行ヲ壮ニスヘク左記電報ヲ打電ス

光栄アル出発ヲ祝ス自愛アレ 午前十時半 末光高女部長（宮沢註・四年生横田操ロスアンゼルス・オリンピック大会

に出場のため）（一九三二年六月三〇日）

- ◇ヒバード講師満期帰国ニツキ其送別会ヲ開催部長ヨリ送別ノ辞ノ後生徒惣代五学年盛賀代送別ノ辞。記念品（モス、友仙模様振袖一着）四学年永井フミ。花束第一学年浜田和子ヨリ惣代トシテ贈呈ヒバード講師ヨリ答辞讚美歌四四一番ヲ唱へ式ヲ閉ツ（同年七月五日）
- ◇本日午後二時ヨリ聯合婦人会、日之出新聞社主催満洲使節歓迎会（日ノ出會館ニ於テノ）ヘノ出席希望者申出ノ件（同六日）
- ◇本日午後三時半ヨリポーリンマンチェスター講師ノ送別会ヲ兼同女史ノ御母堂ノ歓迎会ヲ開催サル御母堂ハ米國ニ於テモ有名ナル「ドラマ」ノ研究者ナルニヨリ別紙題ニテ「ドラマ」ノ Reading ヲ拝聴スルコトヲ得タリ会終了後校庭ニテ「デントン」教授ノ茶話会ヲ催サルマンチェスター親子ニハ女学部及同志社ヨリ夫々花束ヲ贈呈ス（一九三三年六月三〇日）
- ◇朝拜ノ後女子部家政館建築基金募集用ニ新調セル手拭一本金拾五錢ニテ生徒各自ニモ販売スル旨告知セリ
京都府学務部長ヨリ渡満部隊ノ武運長久祈願祭施行ニ付参拜方通告アリタリ（一九三四年七月一〇日）
- ◇北米大学教員ノ日本視察員來校一行八名（同二日）
- ◇学事関係書類及思想対策ニ関スル件本部ニ提出同時ニ府学務課ニ送付ス（一九三五年七月八日）
- ◇上海日本高等女学校ニ二年ニ転学ノ生徒齋藤美代子ノ許可証發行
午前七時五五分京都駅ニ水泳練習出發ヲ見送ル（一九三六年七月一四日）
- ◇午後三時ヨリ日本精神ニ関スル講演アリ（一九三七年六月二八日）
- ◇満洲留學生調査ヲ府学務部ニ提出ス（同年七月八日、宮沢註・この前後に日華事変勃發の記録は全くない）

◇征衣調製ノ割当金ハ朝日新聞社ヲ通シテ寄附スルコトニ致シ度旨華頂ヨリ申出アリシモ当校トシテハ校長會議ノ折ノ申合せニヨリ任意トシテ適宜取計度旨申出ツ

牧野新総長事務取扱ニ着任、午後五時十五分京都駅へ校長出迎ノタメ出向（一九三八年七月五日）

◇本日公報ヲ以テ勅語奉読式ヲ行フ様通牒アリタリ（同一日）

◇午前七時四十五分ヨリ事変一周年ニ際シ下シ賜ヘル勅語奉読式ヲ執行セリ次第別紙ノ通りトス

本年度第二次防空演習本日午前〇時ヨリ挙行ニツキ係員ヲ召集夫々ノ部署ニツキ注意シオケリ（同一日）

◇国民心身鍛鍊運動実施ノ件ニ関シ案ヲ作製（同一日）

◇府ニ心身鍛鍊運動実施要領提出ス（同一日）

◇朝拝ノ際支那事変二周年記念ノ式ヲ挙行セリ

一開式 一君ガ代 一皇居遙拝 一黙祈 一勅語（一周年ニ賜リタルモノ）一誓禱 一閉式

午後二時ヨリ岡崎運動場ニ於ケル市内女学校記念式ニ参加セリ（各組ヨリ健康者ヲ選ビ約 $\frac{1}{2}$ ノ數ヲ以テ代表セシム生徒數六八六教師二六）午後二時開会三時半終了、ソレヨリ市中行進ヲナシ護国神社参拝ノ上四時半解散ス本校ヨリモ十數名ノ病人ヲ出セリ（一九三九年七月七日）

◇満洲国皇帝奉迎ノタメ午後四時半日彰小学校ニ集合折悪シク雷雨来ル雨ノ中ヲ五時十分頃出発四條烏丸南ヨリ東側ヲ南へ仏光寺ニ至ル間ニ整列シテ六時御通過ヲ啓迎ス

満洲国留学生四D李董貞三A楊樹媛兩名ハ永島教諭ニ率ヒラレ丸太町堺町ニテ奉迎ス（一九四〇年七月二日）

◇事変記念日ニ際シ各病院ニ慰問スベキ手紙作製（同五日）

この狭い窓口からも時代の流れを窺うことができる。初め、かなり長期の臨海学舎、外人教師との交流などがスクールライフを彩っているが、それらは次第に狭められ、とくに一九四二（昭和一七）年以降は夏期休暇中にも労働作業、防空演習（これも府学務課に報告しなければならない）などが課され、さらに一九四四年春には、四、五年生の工場動員が行なわれる。かくて「当時の学校では、授業を静かにしているということが何か罪悪と考えられるような雰囲気であった。好戦的な行動だけが正義であるかのように見なされる空気が漂っていた」と回想されるような、軍事色に一元化を強めていく様相がつくられていったのであった。

(1) 久永省一、前掲書、五九一六〇ページ。高橋勘「新制同志社中学校発足の前夜」（同志社中学『同窓会誌・創立百周年記念号』）。なお、和田洋一「一九三七年夏の同志社チャペル籠城事件」（『キリスト教社会問題研究』第八号、一九六四年）にも、同事件後予科教授会が予科長に木畑教授を選出したとき「こういう困難な時期においては、陸軍予備大尉という肩書を持ち、クリスチャンであるが思想的には右よりの木畑教授が最適であるという考え方があったとみていいだろう」と、よく似たケースが紹介されている。

(2) 牧野虎次『針の穴から』牧野虎次先生米寿記念会、昭和三年、八五―八六、一〇九―一五ページなどを参照

(3) 創立記念式や総長就任式などはもちろん、入学式、卒業式なども全同志社が合同で挙行了。また大学の運動会を女子部として観戦すると、女子部内でも女専と高女部の教員も交流が頻繁であり、諸行事も共通であった。礼拝も週一回は合同であった。

(4) 湯浅八郎「就任の辞」『▼学友会同窓会会報』935、第六一号、同志社女専、高女部、昭和一〇年七月一〇日

(5) 片桐哲「現在と将来」（同右）

(6) 土肥昭夫「同志社教育と国家の問題」（『同志社時報』三二号、一九六八年）。高道基「同志社の抵抗」（『戦時下抵抗の研究Ⅱ』みすず書房、昭和四年に所収、二五ページ他）などを参照。なお、一九三七年二月二六日制定、三月三日公表の「同志社教育綱領」は、次の五項である。

- 一 同志社ハ敬神尊皇愛國愛人ヲ基調トシ之ヲ貫クニ純一至誠ヲ以テスル新島精神ヲ指導原理トス
- 一 同志社ハ教育ニ関スル勅語並詔書ヲ奉戴シ基督ニ拠ル信念ノ力ヲ以テ聖旨ノ実践躬行ヲ期ス

- 一 同志社ハ基督ノ真精神ヲ信奉ス
 - 一 同志社ハ敬虔自治日新中正ヲ以テ学风トス
 - 一 同志社ハ良心ヲ手腕ニ運用シテ国家社会ニ貢獻スル人物ヲ養成スルヲ目的トス
 - (7) 『同志社高等女学部新聞』第一七号、昭和一四年三月一五日。ちなみに、現在の同志社女子大学と同女子高校のあるクラスで、この碑の存在を尋ねてみたが、碑のあることを知っている学生生徒は皆無であった。
 - (8) 『同志社高等女学部新聞』第一七号
 - (9) 越智文雄、前掲書
- なお『昭和一七年度教諭会記録』四月二七日の項には「同志社内建物名称変更」の一覧がある。上が「旧名」、下が「新名」である。アイモスト館・新島記念館、ハワイ寮・梨ノ木寮、キング寮・友山寮、ゼームス館・至恩館、プリンプトン寮・寒梅寮。時代を考える一視標になりうる。

四

四〇年代のことであるが、如上の流れの一つの到達点とも言いうる末光信三の抵抗について触れて結びとしたい。戦時下、キリスト教が敵性国家の宗教として厳しく弾圧されたことはすでに周知であるが、一九三七（昭和一二）年の経緯を通して、同志社は国体明徴などについて免罪されたわけではなかった。キリスト教放棄を明示しない限り、そのことは付き纏ったのであり、陰湿なかたちで文部省や京都府学務課の圧迫が加えられたのであった。主力艦船（大学高専）を屠ったあと、小船舶（中等学校）にも当局の目が注がれるに至り、それは同志社高等女学部にも及ぶ。

ここで問題とされたのは、表面校名のことであるが、実は宗教を主義とする諸学校にとって存立にも係わることで

あった。さかのぼって一八九九(明治三〇)年、文部省訓令一二号の「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件」により、法令の規定下の学校においては、課程外でも宗教上の儀式、教育を行なうことが禁じられた。このため宗教系の私立学校には、法令の規定ある学校に相当するものでも、それらの学校としての認可を受けず、私立学校令のみの適用を受け、いわゆる各種学校として存在するものが多かった。キリスト教主義の中等学校の多くは、「中学校」「高等女学校」の名を排して、中等部、女学院などの名称を用いた。同志社に関して言えば、中学は同志社普通学校(一九〇〇年)、同志社中学(一九一六年)、女学校は同志社女学校普通科(一八八九年)、同高等普通学部(一九〇一年)、同普通学部(一九〇三年)、同高等女学部(一九二八年)、そして同志社高等女学部(一九三〇年)、などの名称を用いてきた。したがって、単純に校名ではなく、キリスト教の護持か放棄かの問題と抱き合わせであったのである。

私立学校令のもとでは授業料、入学料なども、学則変更認可の形で監督官庁の認可が必要であったが、当時、同志社から文部省に申請していた授業料値上げを機に、中学校令により「同志社中学」を「同志社中学校」に、高等女学校令により「高等女学部」を「高等女学校」にせよと、京都府庁を通して伝達してきていた。末光教頭は、これを次のように受けとめている。

これまで、あえて「高等女学部」として各種学校の適用を受けていたからこそ、毎日礼拝が許され、聖書を講じ、自由なキリスト教活動が可能であった。しかるに当局の通達をのむなら「最早や一切の宗教教育を停止せねばならぬことになる。従って私共は何が何でも同志社中学、同志社高等女学部でおさねばならぬと覚悟したものである」と。

しかし、同志社内にもキリスト教主義を返上して、外部からの圧迫を回避しようとする意見も決して少なくなかつた。② 中学は、一九四〇(昭和一五)年秋、野村仁作中学長の提案で賛否両論の会議を重ねたが、ついに翌四一年四月

「同志社中学校」と改称した。その後は、屈折ないしは屈服した形のキリスト教主義が生き残る。そしてそれさえも、海軍大佐の校長による効力とみる人びとも多い。

他方、女子部そのものが果して孤立しても抵抗していく主体であったかどうかは確認できないけれども、すくなくとも末光は最後までこだわり、片桐校長をはじめ女子部はそれを支持していたことは間違いない。文部省は督学官を派遣して、キリスト教主義の難詰を繰り返し、さらに京都府学務課を通じて始末書の提出を求めている。かれは、その「高等女学校の組織に行はざる理由書」を、「新島先生の声を聞きつつ精神籠めて書き上げた」という。この理由は、片桐哲校長と連名で一九四三（昭和一八）年一月二五日付で提出された。

書中「この基督教的信念を除いては同志社本来の意義を失ふものと云ふべし。……而して吾人はこの力を信仰の世界に汲んでその大成を期するものなり。信仰あるものには行き詰りなく又絶望なし。無限の力を靈界に汲んで日本人としての使命に邁進せんとするあるのみ」と決意を披瀝し、「而してこの精神を發揮し、この理想を実現するにその道一を以て足らざるも、根本問題としては基督教的信念の修養と宗教的情操の陶冶に重点を置くべきは言を俟たざるなり」。それゆえに「本問題に関しては現状のまま中等学校令に準拠する、同志社高等女学部として継続せんことを希望する所以なり。又若し文部省に於かれて、高等女学校組織の中に幸い宗教教育を加味し得る特典を認めらるる余地ありとせば、吾人は直ちに高等女学校とするに吝ならざるものなり」と、その立場を弁明している。

しかし、文部省は改組要求を弛めず、牧野総長を通じて、同志社高女部の責任者兩名の引退要求に及んだ。それを遷延していた同志社当局は、ついに一九四五（昭和二〇）年四月「同志社高等女学校」と改称することとなった。他方、片桐を女専に専任させて高女と切り離し、新校長に末光を推した。これは府学務課の容れるところとならず、石

塚多教諭が新校長に就任し、末光を女専教授にして切り抜けたのであった。四か月半のちに敗戦は迫っていた。

一九三〇年代の状況のなかで、キリスト教主義同志社は、先頭グループを走ることのできる学校では決してなかったのは当然である。また徹底して抵抗できたわけでも決してない。その両方の意味で、華ばなくもいさぎよくもなかった。しかし、戦時下にも敗戦後にも、常に先頭に立ちうる人や学校に比して、結局は走らされながら、遅く悩みながら走った。⁽⁶⁾ もちろん類似のことは一般学校の場合を含めて、少なからず発見できることだろうが、いま一キリスト教主義女学校についての素描のなかから、思考する素材がえられるならば幸いとしたい。

(1) 末光信三「新島先生の声をきく」(『れんが』第二号、同志社女子中学校生徒会、昭和三八年)。前掲「思い出を語る」。窪田哲三郎、前掲書、二六四―二六五ページ

(2) 加藤延雄「同志社中学校」(前掲『同志社九十年小史』一七九ページ)。末光信三、前掲「新島先生の声をきく」

(3) 加藤延雄、前掲書、一七九ページ

(4) 中学校令と高等女学校令は、一九四三年「中等学校令」に包含された。

(5) 末光信三、前掲「思い出を語る」

(6) ただ、「走らされ、走った」ことを戦後にも終生こだわり続けた森下二郎(長野県立松本高等女学校校長)のような例は、同志社に関して私はまだ知らない。宮沢正典「手塚縫蔵について」(『日本の近代化とキリスト教』新教出版社、一九七三年、二五〇―二五一ページ)、西尾実・清水義穂編『神と愛と戦争・あるキリスト者の戦中日記・森下二郎記』太平出版社、一九七四年などを参照